

環境変動の指標としてのサンゴ礁生態系に関する研究の重要性が認められた「国際サンゴ礁シンポジウム」



シンポジウムでの講演風景

去る平成12年2月23日、24日、東京永田町の日本海運倶楽部で、国際サンゴ礁シンポジウム「環境変動の指標としてのサンゴ礁生態系の多様性と健康」が開催された。

このシンポジウムは海洋科学技術センターの主催で、科学技術庁と日本財団の後援を得て行われ、参加者は海外6カ国からの22名を含め175名を数えた。

当センターでは、我が国最大のサンゴ礁海域である石西礁湖（石垣島と西表島の間）を対象にサンゴ礁生態系の研究を進めており、本シンポジウムは世界最先端のサンゴ礁研究の動向を明らかにし、世界共通の研究目標の作成に役立て、さらに世界規模の共同研究へと展開し

ていくことを目的として行われた。

平野拓也海洋科学技術センター理事長の開会挨拶を皮切りに、2日間、5セッションからなる33件の研究発表が行われ、活発な質疑応答と充実した内容の討議が交わされた。

開会挨拶では、平野理事長から地球環境変動の生物学的な指標としてのサンゴ礁研究の重要性が強調され、本会の主旨説明がなされた。次に、池田要科学技術庁研究開発局長から、サンゴ礁生態系は地球環境において重要な機能を果たしており、近年世界的に注目を集めている旨の挨拶があった。これに引き続き、5つのセッションにおいて各研究テーマについての講演・討議が繰り広げられた。



海洋科学技術センター 平野拓也 理事長



科学技術庁 研究開発局長 池田 要 氏



国際サンゴ礁学会会長 Terry Done 氏



シンポジウム会場

特別セッション“日米共同のサンゴ礁研究ミッション”では、米国フロリダのキーラルゴ沖に設置された海中研究室における日米共同のサンゴ礁研究ミッションや飽和潜水技術を用いた浅海生態系研究について紹介。浅海の生態系調査において、海中滞在時間や減圧の問題を心配する必要がなく、さらに夜間にも自由に調査研究が可能なお記手法の有用性が報告された。

セッション “サンゴの生物学” では、サンゴの白化を発生させる水温閾値^{すいおんいきち}についての研究や、沖縄近海におけるサンゴの天敵などに関する研究、陸奥湾に生息する小型で稀少なサンゴの生態などが紹介された。

セッション “サンゴ礁生態系の動態” では、サンゴと環境との関連についての研究報告、また、サンゴ礁の調査計測手法や、サンゴと魚類など他の生物との

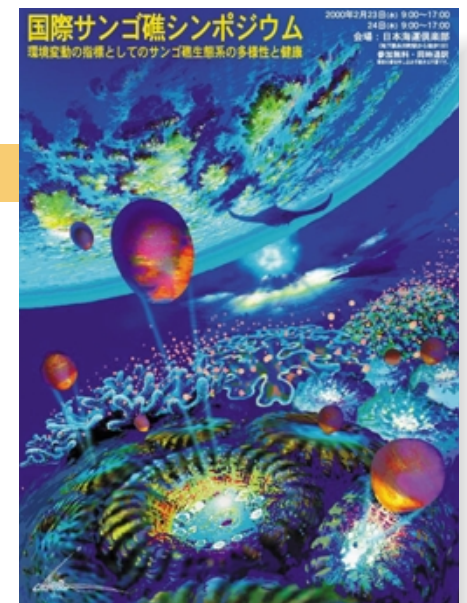
関連、さらに減少したサンゴの回復方法などが報告された。

セッション “沿岸生態系の動態” では、サンゴ礁生態系のほか、海草、海藻やサンゴに穴を開ける貝類などの関連生物も含めた研究が報告された。

セッション “人類の生存とサンゴ礁の関わり” では、国際サンゴ礁学会会長 Terry Done氏からの豪州グレートバリアリーフにおけるサンゴ研究の紹介、また、人類とサンゴの共存のための課題や、今後の地球温暖化とサンゴ礁生態系の変化などが報告された。

ハワイ大学地球学部の平野哲也教授は、閉会の挨拶において、本会議が幅広い関連分野における質の高い講演や活発な討議を通して、サンゴ礁研究の現状把握と研究課題を明確化するための、非常に有意義な場となり、当初の目的を十分達成できたと述べた。

今回のシンポジウムでは、広範囲のサンゴが短期間の環境変化に大きく影響されることが強く認識され、サンゴの生態を地球環境指標とする場合の国際協力の必要性、さらに測定法の統一を含む指標の統一が提案された。また、今後のサンゴ研究における問題点、今後の課題が再認識されるなど、内容・成果ともに充実したものとなり、盛況のうちに終了した。



シンポジウムポスター / 「サンゴ産卵」のイメージ



ハワイ大学教授 平野哲也 氏

左：日本サンゴ礁学会 会長 山里 清 氏
右：総合同会 海洋生態・環境研究部 岡本峰雄 主幹